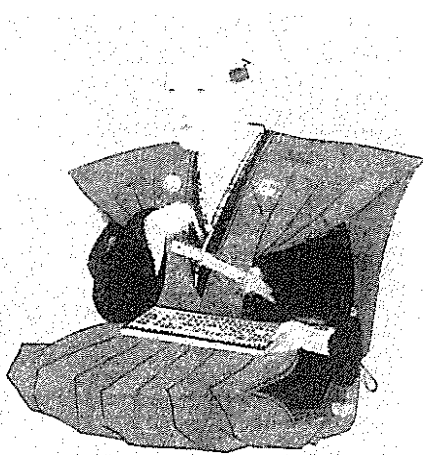


石黒絵図から学ぶ越中近世史

1、高木村藤右衛門(石黒信由)の業績



①宝暦 10 年 (1760) 射水郡高木村 (新湊市高木) で誕生

②信由の実学

(1)学問：江戸時代の和算・西洋数学・測量術・天文学・暦学・
地図作成

(2)著書 180 点。和漢の蔵書数全国有数。和算の名著『算学鉤致』、
遭難時対策『算法渡海標的』

③測量実績

(1)村肝煎：24 歳～⇒射水郡網張人：35 歳

(2)放生津御蔵・放生津湯回り⇒射水郡全域測量

(3)舟倉野 (大沢野町)・室山野 (滑川市)・小椿野 (魚津市)
新田開発のための測量

(4)邑知瀉水矯 (直流工事) 測量：57 歳

④地図の作成

(1)射水郡大絵図の作成と提出：⇒石黒絵図1：50 歳←文化 5 年 (1808) 金沢城の火災で地図焼失

(2)加越能三州測量拜命：59 歳 (新田才許役就任) ⇒文政 2 年 (1819) 郡図 10 枚を藩に提出：64 歳

(3)越中・加賀・能登各国図 3 枚・越中四郡村々組分絵図⇒石黒絵図2：文政 8 年 (1825)、65 歳

(4)加越能三州郡分略絵図を完成：65 歳、⇒石黒絵図3

(5)「三州測量図籍」を完成、提出：75 歳

(6)天保 7 年 (1836) 9 月「増補大路水系」執筆、12 月死去：77 歳



2、高木村藤右衛門(石黒信由)の先生たち

①測量技術：基礎は祖父・地域

②和算：富山藩中田高寛

③測量学：金沢町 宮井安泰

④天文学：城端町西村太冲

⑤測量具：伊能忠敬

3、伊能忠敬の沿岸測量と石黒信由

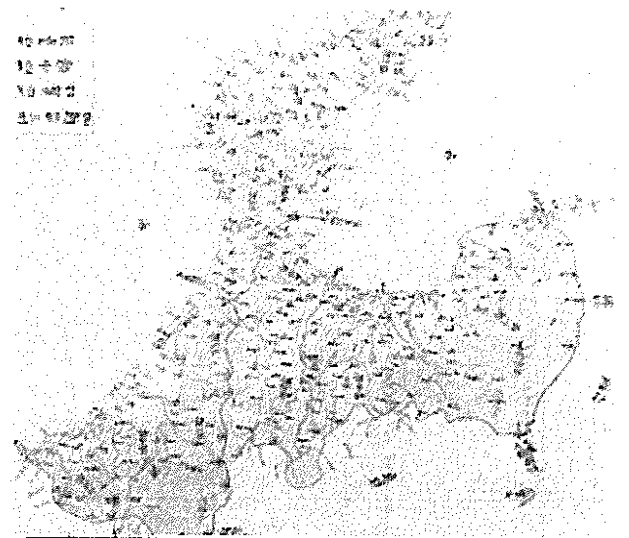
①加賀藩の対応：享和 3 年 (1803) 6 月末～8 月＝
第 4 次測量、忠敬自己負担、幕府公認、隠密嫌疑

②異例な忠敬と信由の対面：＝1803 年 8 月 3 日夜、放生津町柴屋＝石黒信由、天文観測を見学。8 月 4 日婦負
郡四方町 (富山市) までの海岸測量を見学

③忠敬のワンカラシン＝信由「強盗式磁石盤」開発の契機。



石黒絵図2



石黒絵図3 = 加越能三州郡分略絵図

越中の主要街道と宿・町 ↓

4、文政8年越中四郡村々組分絵図 ↑

「石黒絵図2」から学ぶ越中近世史

①加賀藩主往還道の正しい経路

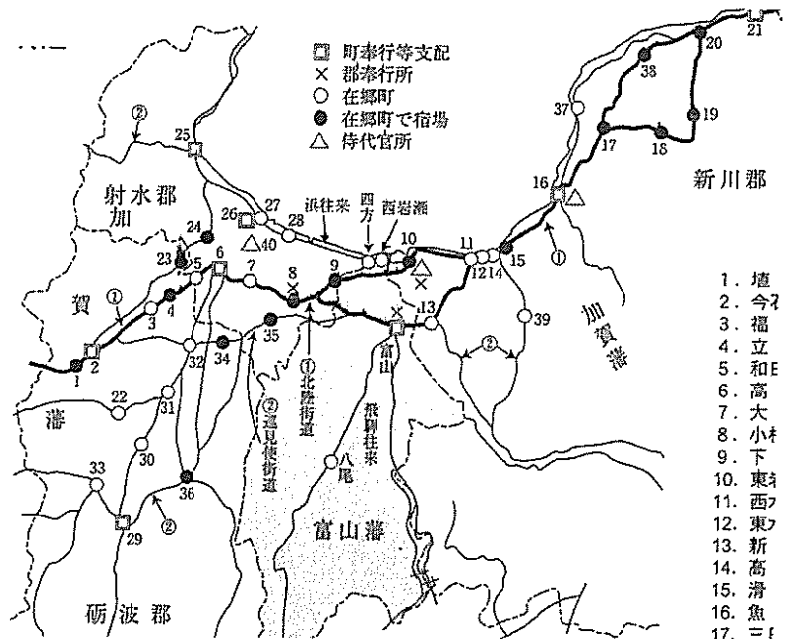
- (1)北陸街道の変遷→三つの北陸街道
- (2)加賀藩主往還道を検証する、
- (3)加賀藩主は富山城下を通らないのが原則
- (4)加賀藩 宿場の指定

寛文2年(1662)

○東海道53次、越中北陸街道は_____宿

宿場の定義：

※松尾芭蕉の通った道



②加賀藩の行政範囲を知る

(1)文政8年の石黒絵図2では、鏡宮の所属行政区は法内組、射水郡には、他に倉垣組、浅井組、二上組、上庄組、南条組、八代組の計7組があった。

(2)越中全体の十村組を図で理解する→裏付け調査で、この組域は寛永19年(1642)制定され、天保9年(1838)までの約200年間続いた。

(3)天保10年(1839)十村組(行政区)大改編：

—今後デジタル化予定—

射水郡は10組となった。

天保10年以後の石黒絵図では大袋組はたった5町村で1組になった。越中最小町村数の十村組。

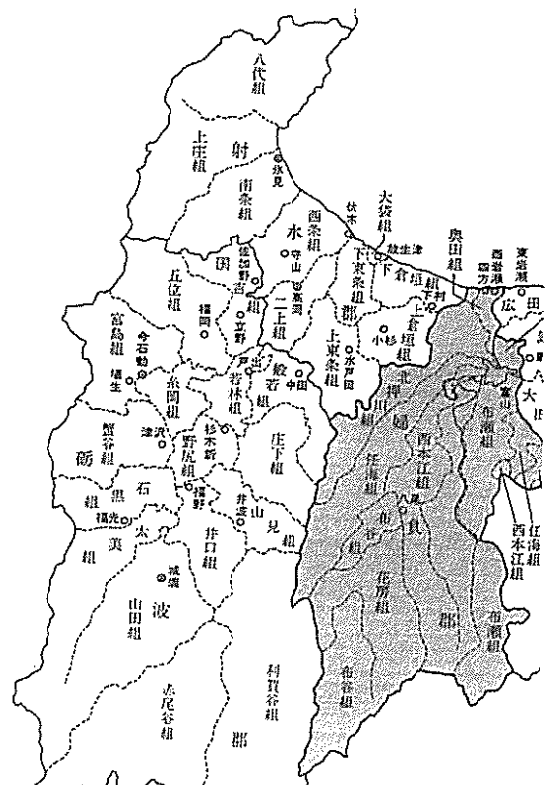
○歴史的に意義のある絵図のデジタル化。

寛永 19 年(1642)から天保9年(1838)までの十村組



↑ 石黒絵図2を現在の地図に転写、
十村組を色で区別

天保 10 年から明治3年(1870)までの十村組



射水郡大袋組の町村=放生津・放生津新・荒屋・法土寺・四日曾根

天保 10 年の十村組改編でもっとも大きな変化は、わずか5町村からなる大袋(おおえ)組の設置である。改組以前は56カ町村からなる倉垣組に属していたが、放生津、放生津新町が港町として発展し、戸口を増大していた(江戸初期の2倍から3倍に増加)。倉垣組には宿駅「下村」もあり、参勤交代時には大きな負担と責任が課された。倉垣組の在郷町を中心とした膨脹・変貌は、一人の十村役による組内支配を極めて困難にしていた。

この放生津・放生津新町の膨脹に対応するため、わずか5町村からなる大袋組が新編成された。おそらく加賀藩全組中もっとも町村数の少ない十村組であった(平成16年3月刊『新湊市博物館研究紀要』)。

高樹会代表理事・射水市新湊博物館研究員 保 科 齊 彦